雑賀清子《さくら》　田辺市立美術館蔵

雑賀清子《やまぼうし》　田辺市立美術館蔵

雑賀清子《のぶどう》　田辺市立美術館蔵

雑賀清子《ふゆいちご》　田辺市立美術館蔵

REPORT「湯川雅紀　2011-2022」

今年の4月から6月にかけて開催した特別展「湯川雅紀　2011-2022」は、和歌山県海南市の画家、湯川雅紀さんの制作を、ドイツ留学帰国後から現在に至るまでの作品によって紹介する内容で、留学中に描かれた小品やスケッチも含めて振り返りました。

会期中の5月14日と6月18日に、湯川さんによるアーティストトークを開催しました。湯川さんは、留学中に楕円をモチーフにして絵画の空間の問題をテーマとする自身のスタイルを確立したこと、帰国後はそのときどきに関心の向いた空間の問題について探究を重ねたこと、近年はこれまでの表現をベースに、自身ではコントロールできない部分や不確定な要素を積極的に取り入れようとしていることなど、制作に関わる様々なことを語ってくれました。

またエントランスホールにワークスペースを設置して、湯川さんにグレーの楕円を描いていただいた大きな紙を貼り出し、その上に思い思いのかたちに切った色紙（いろがみ）を重ねていって、みんなで一つの大きな絵をつくる試みも行いました。日を追うごとに色紙は増えてゆき、最終的には紙の地が見えないほどになりました（右の写真）。

来館者の方々によってつくられた
ワークスペースの大きな絵

（学芸員　知野　季里穂）

田辺市立美術館へのきもち㉗

「日本美術は接ぎ木のようなものだ。」これは私が田辺市立美術館の学芸員、三谷渉さんからうかがった言葉である。

2005年の夏、当時私はドイツで制作活動を行っていたが、夏休みに帰国し知人の紹介で田辺市（正確には隣町の上富田町南紀の台）にあるギャラリーで展覧会を開催していた。その展覧会場を三谷さんは訪れ、初対面の私に向かって上記のような言葉をはじめ、いろいろな考えを披瀝してくださった。和歌山県の田辺市という場所で、自分が常日頃ぼんやり考えていたことを明快な言葉で代弁してくれる人に出会えたことに私は驚愕した。

「明治以降の美術は無理やり接ぎ木したいびつな形になっているから、それを正すには外から日本の状況を俯瞰できる視点を持たなければいけない。湯川さんの作品にはそういう視点が感じられる。とてもユニークで、貴重な制作態度だと思う。」

三谷さんはそういうふうに私の作品を評価してくださった。かなり昔の話なので一言一句正確には覚えていないが、要旨は間違っていないと思う。

日本で美術を志すとどうしても西洋と東洋の違いに直面することになる。これは日本が明治時代に西洋文明を急いで取り入れたことに起因している。伝統的な絵画の歴史はいったん明治で切断され、その断面が洋画と日本画という二分野に枝分かれしてそれぞれが独自の展開をしていった。三谷さんはこれを「接ぎ木」と称されたのであろう。

私自身も学生のころ、制作にあたって東洋と西洋の美術に対する考え方の違いというか、断絶に近い溝を感じて暗澹としたものである。美術に興味を持ったきっかけが西洋美術、というかいわゆる洋画だったので、とりわけそうだったのであるが、何を描いても西洋の考えを模倣しているだけで、日本人である私が本物の作品など描けないだろう、という思いから表現方法に行き詰っていた。

この思いを払拭するために、私はドイツ留学を決意した。

「自分は日本人だがそれでも西洋美術から発展した現代美術の世界に興味を持っている。西洋美術が自分の表現にふさわしいかどうか、いっそ自分の眼で西洋世界を見て、感じ、その美術の神髄を自分なりに理解すればよいのではないか。そのうえで、日本人である自分が何を表現すべきなのか見極めたい。」

そういう思いでドイツに渡り、紆余曲折を経て、曲がりなりにも自分の表現を見出しかけていた頃に出会った三谷さんの「日本美術接ぎ木説」はまさに我が意を得たという思いであった。そうだ、自分はここにモヤモヤとした気分を抱いていたから、今こうやってドイツで制作活動をしているんだな、とようやく腑に落ちた。ドイツに渡って 10年以上が経っていたが、2005年の田辺市で私の留学生活は報われたといっていい。

以来、田辺市立美術館とそこに関係する方々には様々な形でお世話になりながら現在にいたっている。2010年に帰国し、和歌山を拠点に東京で作品発表を続けていたが、三谷さんとは作品を通して絶えず交流があった。またその間、田辺市で教育に携わる機会を用意してくださったり、折に触れ私の作品を啓蒙し続けてくださったりした方もおり、日本で制作活動を続ける上での心強い支えとなった。そして近年田辺市立美術館に着任された学芸員の知野季里穂さんのご尽力もあり2022年4月、特別展「湯川雅紀　2011-2022」の実現をみた。

最初に三谷さんにお会いしてから 17年の月日が流れたが、それだけの年月の積み重ねがあって、その間様々な人が私のことを気にかけてくださって、はじめてこれだけの規模と密度の展覧会が実現できたのだと感じている。現在の私のキャリアにとって大切な、欠かせない方々がこの展覧会の実現に向けて心を砕いてくださったことに、あらためてこの場をお借りして感謝の意を表したい。

そして自分はこれからも東洋美術と西洋美術が幸せに手を取り合って、一本の大樹のように雄大な風景を形づくる瞬間を待ちながら制作に勤しんでいこうと思っている。

田辺市立美術館でのアーティストトーク

（画家・関西福祉科学大学
教育学部教授　湯川　雅紀）

田辺市立美術館NEWS　ORANGE　Vol.37
編集・発行：田辺市立美術館
発行年月日：令和4年10月1日

田辺市立美術館
〒646-0015　和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館
〒646-1402　和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

編集後記

今号もお読みいただきありがとうございます。4月から新しい学芸員スタッフが加わりORANGEの執筆陣も多彩になりました。田辺市立美術館のある新庄総合公園は、全日本花いっぱい田辺大会に向けて賑やかになってきています。ぜひ一緒にお楽しみいただければと思います。皆様のご来館をお待ちしています。
（F.O.）

田辺市立美術館NEWS
ORANGE
Vol.37

中野恵美子《連なる》 2007(平成19)年　田辺市立美術館蔵

作品制作と《連なる》について

織物といえば着尺か服地の時代に、2度目の大学でファイバーアートという新しい世界に出会いました。そのことが機縁で織でできることの新たな可能性を求めて「織造形」に取り組み始め、公募展に出品していました。自分の制作が表層的になったなと思った頃に、アメリカのクランブルック・アカデミー・オブ・アート（ミシガン州デトロイトにある大学院大学）に留学する機会があり、そこで制作を見直すことになりました。その後ブラジルに滞在することになり、環境の異なる生活の中で新たな試行錯誤が始まりました。アンデスのトレッキング、広いブラジルの大地での旅の印象から大地に関わる作品を制作しました。

材料の入手がままならないブラジルではサイザル麻を用いていましたが、「日本で材料を限ったら何がある？」と考え始めました。以前訪れた山形県鶴岡市の致道博物館で見た大福帳等使用済みの和紙が織り込まれた衣類が記憶に蘇りました。繊維素材が限られていることからの工夫ではありますが、その美しさが印象深かったのを覚えています。そこから身近にあった書道の和紙に行き着きました。帰国後、和紙で制作し始めましたが、伝統の基本も大事と思い、和紙を細く切り撚った糸を織る「紙布」の勉強もしました。

以前敦煌、鳴沙山の砂を顕微鏡で見たことがあり、砂に様々な色があるのに驚かされました。さながら一粒の砂にも大地生成の歴史が宿るようで、そのように織布に情報を内包したいと人類のエッセンスとも言える文字（写経による経文、元素記号等）を木版、シルクスクリーン等で和紙に刷ったものや書道の文字を用意し織り込みました。

さらに織物特有のテクスチャー（材質感、手触り感）を求め、伝統を応用しながら物理的変化を取り入れることに挑戦しました。強い撚り糸を用いた「縮み」という着物地がありますが、その強撚糸を用い、和紙を織り込み、さらに板締め絞りという2枚の板で布を挟んで染料に浸して染める方法を用いて、パターンの部分を板で挟んで、製織後温湯に浸けてみました。すると板で挟んだ箇所を残して全体は半分のサイズに縮み、和紙と強撚糸が生み出すテクスチャーが生まれました。

織は経糸と緯糸の交差でできています。緯糸をベースに絵を描くように織る綴織の世界と、経糸の浮き沈みで模様を出す組織織の世界があります。私自身は後者に関心があり、構造をベースに多層織に取り組んできました。「連なる」は四層織で仕上げています。連綿とつながる世界を表現してみました。

祈り、大地、文字をテーマに試行錯誤を続けています。作品制作は歩み続ける自己の変化を確認する行為とも言えます。一歩一歩歩みながら道標を立てているかのようです。
（中野　恵美子）

※今回特別に作者の中野恵美子氏より自作についてのご寄稿をいただきました。